

ストライク・ザ・ブラッド 偽りの剣製の誓い

影使い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大切な人を護りきれず没した主人公が気が付くと大災害の現場で士郎と言う少年になっていた。

そして、衛宮切嗣に引き取られ衛宮士郎となった主人公は大切な妹と再び出来た守り抜きたい人を助ける為に聖杯戦争に挑む。

そして、原典とは違い完全な勝者となった偽りの衛宮士郎は愛する二人の少女達と聖杯の力を使い世界の壁を突き抜け異世界に世界飛んだ。

だが、全てを捨て逃げ込んだ世界でも厄介事からは逃げ切れず衛宮士郎は戦いに巻き込まれていくのだった。

※主人公は衛宮士郎に憑依した誰か。切嗣の英才教育で2代目魔術殺しを名乗る程度には魔術、戦闘に関する技術があります。

冒頭はFate/kaleid liner プリズマ☆イリヤ 雪下の誓いのIFストーリーから入ります。

魔法少女成分は現状ではほとんどないです。ワンちゃん有れば美遊 or 桜の夢幻召喚イニストロールが有るかも？

目次

第3話	第2話	第1話
22	13	1

第1話

昔、憧れた物があつた。

どんな困難も覆し、どんな絶望の真つ只中に居る人をも助けられる正義の味方ヒーローに憧れていたんだ。

だけでも、大人になるに連れてそんなものは偶像フィクションに過ぎないと思うようになっていった。

誰もを助けられるそんな存在は居ない。そんな冷めた大人になつた俺を精々自分が守れるのはこの手が届く大切な人だけだとそう思う事が出来るようにしてくれた人が俺にも出来たんだ。

だけでも俺はそんな簡単だけでも重要な事さえも出来なかつた。

突然現れた通り魔に胸元を刺され地に伏せる俺。

そして、目の前で狂喜しながら俺の大切な人を滅多刺しにしていくそんな光景を見せ付けられながら俺の意識はズブズブと暗闇の中に沈んでいったんだ。

ここで俺は死んだはずだつた。

次に目が覚めると目の前には全てを飲み込む黒く恐ろしい何か將近付いて来る地獄が広がっていて、何故か俺は子供になつていた。

気が付くと俺は逃げ出していた。状況は上手く掴めていなく思考はぐちゃぐちゃだつた。

目の前に広がる大災害に何も出来ず死んでいく人々、ついさっきの様に見せられた死ぬ前の大切な人が死んでいく光景。

そのどちらもが微かに残つた心を粉碎して俺を追い込んでいった。すでに体はぼろぼろで、歩く気力さえも尽き果てた。

そんな時、俺を助けてくれたのは後に義理の父親になつた衛宮切嗣だつた。

その傍らには後の義理の妹、美遊も居た。

それから暫くして俺は切嗣に引き取られた。

そこからは平凡だが人並みに幸せな生活が続いたんだ。

その合間に、俺は魔術と言う神秘を習っている。

本来は秘匿され、身内に伝えていく物だが切嗣は魔術師だった事から習うことになった。

魔術を習い始め、数年後切嗣は静かに息を引き取った。その際に美遊が持つ『人の願いを無差別に叶える力』の事やその力を使い世界の救済を掲げていたエインズワースの事を聞いた。

切嗣はエインズワースの世界の救済に賛同して協力関係にあったらしいがあの大災害を目にして何かが違うと感じ取ったらしい。

そして、相討ち覚悟で当主を討ち取り美遊を連れて逃げ出したらしいんだ。

俺に魔術を教え込んだのもエインズワースは完全に活動を停止しているが何時活動を再開して美遊を強奪しにした時の備えだったんだ。

俺は息を引き取る間際の切嗣に美遊は護りきつてみせると誓ったんだ。

切嗣が息を引き取ってから数年が経ち、俺は高校生になった。

あの大災害が災いして生徒は学校が成り立つギリギリの人数しか居なかったがそれでも、ごく普通の学校生活を送ることが出来ていた。

切嗣が居なくなってしまうって美遊とは良好な兄妹の関係になれるか心配だった。

でも、何時だか美遊が俺と本当の兄妹になりたいと願いを流れ星に願ってからは不思議と上手くやっていけると思うし、同じ部活で一年後輩の間桐桜とも良くやっていけている。

彼女は前世の大切な人に良く似ていた。

前向きな所や優しいげな表情、その声まで全部が。無意識にあの^彼女^女を意識してしまったのかいつの間にか彼女との距離は縮まっていった。

こんな何時までも続けば良いと願ってしまうぐらい幸せな日常

だった。けども、そんな日常は簡単に打ち砕かれてしまった。

エインズワースが再び活動を再開した。

エインズワースの連中は俺と美遊、そして桜が居た日本家屋に襲撃してきた。

必死に抵抗したがただの魔術師と英霊化した魔術師の差は歴然で俺は奴等に敗北し美遊と何故か桜も連れていかれた。

俺は始まりのあの日の光景を重ねながら意識を失う。

|| || || || || || || ||

「ここは……？」

「気が付いたか、少年。ここは冬木教会。まあ、誰も巡礼に来ない忘れ去られた廃教会だ」

気が付いたらそこは冬木にただ一件しかない教会だった。そして、俺が寝込んでいたベッドの隣に座っていたカソックを着込む神父がいた。

「そうか……世話になったな。あんたが治療してくれたんだろ？」

「言峰綺礼だ。ああ、自己紹介はしなくて大丈夫だ。衛宮士郎。あの魔術師殺しの息子よ」

俺の名前を言峰綺礼が言った瞬間、無意識のうちに弾かれたように身体が距離を取る。

「てめえ……エインズワースの仲間か……それとも親父に恨みでも持つ魔術師か……」

「はあ……待て。私は彼らの仲間ではないし魔術師でもない。

私はこの冬木で行われている聖杯戦争の監督役として聖堂教会の者だ。

それに……ある程度、此方側に居るものは衛宮切嗣魔術師殺しの名を知らぬものは居ない。

そして、そんな男と同じ姓を持つ君が衛宮切嗣の息子だと言うことは一目瞭然」

「そうか……悪かったな……。治療代はまた払う」

急激に動き出した反動か激痛を訴える身体を無視して立ち上がり外に向かおうとすると言峰綺礼は俺の行く手を遮る。

「まあ、待て。今、無鉄砲に飛び出し何になる？ 衛宮美遊と間桐桜の居場所も知らないのだろうか？」

「……そうだ。だけど、動かないと……」

「……聞け、少年。」

現在、この冬木はエインズワース主催で聖杯戦争が開始されようとしている。

そして……その優勝者には聖杯が手にいれる事が出来る。その聖杯とは衛宮美遊朔月と間桐桜だ」

その言葉で頭が真っ白になる。考えもしなかった現実に頭が追いつかず、思考が定まらない。

「おい……どう言うことだ……。桜が聖杯だと?! 聖杯は神稚児だった美遊だけのはずだ!! 冗談は止めてくれ!!!」

「いや、それは違う。」

間桐桜は前々回の聖杯戦争で使用された聖杯……朔月家に伝わる神稚子の血肉を取り込まされ限定的ながら力を持ってしまった人工的な聖杯だ。

大方、衛宮美遊の失った機能を補助させる為に使われるのだろう。だが、衛宮士郎。そこに貴様の勝算がある。

最もそれは砂漠の中から一粒の宝石を探しだすが如く、か細い道筋だがね」

そう言つて言峰綺礼は懐から1枚のカードを取り出し、差し出してくる。

そのカードは弓兵の絵と『Archer』が書かれた色褪せたカードだった。

「持つていけ、これはクラスカードという。

もしくは聖杯戦争の参加資格とでも言うべきか。もつともそれは機能を失った前回の物だがね。それでも無いよりはマシだろう？
でわな、衛宮士郎よ。君がこのイカれたデキレースを破壊してくれる事を願っている」

|||||

それから俺はエインズワースの本拠地、あの大災害の爪痕であるクレータークレーターの中央に美遊と桜は居る事を聞き出し、そこに向かう。

だが、エインズワースが1枚上手で先に英霊化した魔術師の刺客を送り込んできた。

言峰綺礼の話が確かなら戦争戦争の参加者は全員、エインズワースに殺され人形に人格を置換させられた操り人形らしい。

「あひゃひゃひゃひゃ!!無様に逃げ回れよ!!そうそう、そんな感じで豚みたいに泣きながらさあ!!」

「ぐううっ!!」

目の前に現れた英霊化した魔術師と俺の戦闘力の差は大きい。

だからこそ、防戦に徹しチャンスをうかがっていたがその努力も虚しく俺は倒れ込んでしまう。

「良く頑張ったよ、君い。なんでかクラスカードは持つてるみたいだけど所詮はカスカードアサシン。それが本物ならボクを万が一でも倒せたかもねえ!!」

息の根を止めようと放たれた一撃が自棄に遅く見え、前世と現世の記憶がフラッシュバックする。

そして、三人の顔が浮かび上がる。一人目は前世の最愛の人だったあの子、二人目は現世で出来た大切な妹^遊、三人目は現世の最愛の人^遊。

そうだ、俺はこんな所で死ねない……もう大切な人を失いたくないんだ……。だから、寄越せよ……！俺の全てをくれてやる。だから……二人を守る力をつつ！！

その瞬間、何者とも繋がってなく色褪せたクラスカードに色が戻る。

そして俺は未来の英雄、なんの偶然か分からないが平行世界の自分の力を宿した。

俺は繰り出された一撃を回避し、カウンターとして右ストレートを仮面で隠された刺客の顔面に入れ吹き飛ばす。

「へっ……？ 痛い？ 痛い?? 痛いなあああああ!!」

……どうして?! そのカスカードでどうして夢幻召喚出来る?!

そうか……そうか!! そうなんだな!! 聖遺物を隠し持ってたな?! そいつで座に繋がったのか?!

「うるせえよ」

聖遺物なんて大層な物なんてオレは持っていない。何せ、俺自身が聖遺物の様な物なのだから。

平行世界の自分が愛用していた陰陽の夫婦剣を投影して即座に切り付ける。

浅かったが斬撃は首筋に裂傷を与える。そこから追撃で腕を切り落とし、足に剣を突き刺す。

「ひっ……。まてまてまてええええ!! そうだ、僕が悪かったな!!」
「何?」

と、声を荒げて命乞いをしてきたので一旦攻撃を納める。そして、アサシンのエインズワースの刺客が土下座をしてくる。

「降参だよ……。だからカードを渡す代わりに見逃してくれよ……」
「……」

アサシンの魔術師の必死の命乞いに思わず剣先が下がる。その瞬間、アサシン魔術師の表情が一気に歪む。

「あひやひやひやひやひやひや!!! そんな分けないだろう!! 僕のためにシネええええ!!」

「だと思った」

突然、後方から切り落とした腕が触手の塊となって襲ってくるがそれを大剣を幾つも投影し壁にして防ぎ、適当に投影した剣の宝具を矢に変換し、ブローケンファンタズム壊れた幻想で吹き飛ばす。

「ひいひいひい?! 誰だ?! 誰なんだ?! そんな弓兵で双剣を……。それにそんなに剣を使う英雄なんて僕は知らない……。知らない!! 何なんだよ……。お前はああああ?!」

その様子を見て破れかぶれになったのか、起死回生を謀ったのか解らないが鬼の形相で勢いで突っ込んで来る。

俺は逆にアサシン魔術師との間合いを詰めて、剣を投影、その剣を胸に深々と剣を突き立て、そして続けざまに斬り捨てる。

「別に……。ただの理想と現実の差に絶望した英霊崩れだよ。じゃあな」

倒れ付した魔術師アサシンは憑き物が落ちた様に表情が柔らかくなる。

そして……

「ぐぎっ……え、衛宮……し、士郎……頼む……さ、桜を頼んだぞ……」

その言葉と共に生命活動が停止した。

同時に身体は人間の物から人形に変わり、クラスカード・アサシンが落ちていた。

「お前は……桜を頼むか。っ……。……言われなくてそのつもりだ」

そこからは怒濤のようにエインズワースの刺客が襲ってきた。だが、未来英霊の自分エミヤ自身との同調は完璧でより多く英霊の力を引き出すことが出来る俺に勝算があった。

そして、俺イレギュラー以外の七騎のエインズワースの刺客を倒し俺は名実共に聖杯戦争の勝者になった。

|| || || || || || || || ||

長かったたった一人の戦いは終わり、すべてのカードを収集し俺は聖杯戦争の勝者として円蔵山の地下大空洞に赴いている。

「桜を……そして美遊を返してもらおうぞ……エインズワース」

俺の目の前に最愛間桐の人と大切な家族美遊を拐っていった張本人、エインズワースの現当主が居る。

「お前……それが人類全体に対する裏切りだって分かっているのか？」

エインズワースは俺を蔑むような目線で言葉を絞り出してくる。それが感情を押し殺した物だと一目で理解できる程に。

「ああ……そんな事か。」

なあ、エインズワース。お前には何かを心のそこから護りたいって思ったことはあるか？ その護りたいって思った物を護りきれなかった事はあるか？」

「そんな個人的な感情は世界の救済の大義名分の前には些末なものだ」

怪訝な顔をしながらエインズワースは苦々しく答えを返してくる。これには俺も少し驚いた。

そして、同時に理解する。こいつもまた大切な人を守れなかったんだ。そして、何処にもその気持ちを吐き出せないまま世界の救済を謳うエインズワースのしがらみに捉えられていることに。

「悪いな……俺はお前みたいに感情を押し殺すなんて芸当出来ないんだ。」

俺は最愛の妹と惚れた女妹だけは何をしてでも護りきってみせる。

それはお前やこの世界から見たら裏切者……悪だろうな」

「……っ。てめえはっ……それが解っているのに……何故だっ?!」

そして、俺の持つ8枚全てのクラスカードを強奪するために魔術回路を起動する素振りを見せる。

「させるか!!トレスオン投影開始」

ビキビキと身体が軋む様な感覚を無視して投影した剣を射出、掴みかかってくるエインズワースの目の前に突き刺さる。

「それはあのカードの力だと……衛宮士郎……貴様は……」

俺とエインズワースを遮る剣の壁が出来る。そして、空中に幾重もの剣を投影して剣先を全てエインズワースに向ける。

「……っ」

「宛が外れたなエインズワース^{正義の味方}。

お前らは知らなかっただろうが……自分自身のカードを使い続けた魔術師はその身を英霊に書き換えられるんだよ。

ご覧の通り俺は英霊の紛い物に成り下がった死に損ないさ。

カードを潰した所でお前程度なら俺程度の劣化した贗作でも潰すことも造作ないぞ。……じゃあな、もう二度と会うことは無いと願ってるぞ」

俺はカードを使わずに英霊エミヤの投影を使って、驚愕したエインズワースに待機させていた剣を一気に射出する。

そして、その様子を見届けて背を向ける。

これで二人を救う事が出来る。そして、二人に願おう。^{聖杯}『この世界の誰にも干渉されることなく美遊と桜と3人で幸せになれますように』と。

地下大空洞の最奥にたどり着くと儀式様の祭壇に二人は寝かされていた。

俺が近くに行くと二人は気が付いたのか目を開けて顔を俺の方に向けてくる。

そんな二人になんて声を掛けて良いのか解らなかったので、俺は何時もの様に自然体で話し掛ける。ただし、目頭には涙が浮かんでしまったけどな。

「美遊、桜。迎いに来るのが遅くなってごめんな」

「おにい……ちゃん……？」

「せん……ぱい……？」

「ああ、もう大丈夫だ……もう大丈夫だから……」

そして、二人の手を両手で握りしめ俺は願った。

『我、聖杯に願う。美遊や桜が決して苦しまなくて良い世界に行けます様に。そこで俺達3人が細やかな幸せを掴めますように……』

願いが終わった瞬間、俺達の周りが膨大な魔力で包まれる。俺の言葉の真意を汲み取った聖杯が命令を実行しようとしている。

「せん……ぱい……い……」

「おに……い……ちや……ん……」

「ごめんな、頭が悪い俺じゃあこんな事でしか二人を幸せを出来なさそうなんだ」

俺が選んだのはこの世界から全てを捨てて逃げ出すこと。多分凄く起こられるんだろうなああって思いながら俺は、俺達は第2魔法の奇跡に身を委ねる。

そして、暖かな光に包まれながら俺達はこの世界から逃げ出した。

|| || || || || || || ||

紡神島。自然の島ではなく東京の南方海上330キロメートル付近に浮かぶ人工島ギガフロートの一角に突如膨大な魔力の反応が検知された。

そして、現場に急行した特区警備隊アイランド・ガードが発見したのは8枚のカードが散らばった中で意識がなく倒れていた二人の少女とその真ん中で少女達の手を意識がないのにも関わらず固く握って離さなかった傷だらけの少年だった。

第2話

目を開けると、白を基調とした病室と思わしき部屋に寝かされていた。消毒液のアルコールの匂いが鼻を刺激し、身体中から痛みを訴えてくる怪我がこれが夢でないことを語っている。

周囲を見渡すと美遊と桜が規則正しい寝息をたてて寝ていた。その事実には安堵しながら改めて気が付く。

窓からは都市の夜景と共に海が望めるのだ。それは俺が居た季節が反転し、まるで氷河期みたいに陸地が増えたあの世界の冬木では絶対に有り得ない光景だった。

壁に掛かったデジタル時計に記されていた日付は前世と同じ四季と暦は一致している事、そして西暦があの世界と違っているのを見て俺はここが異世界だと確信する。

まあ、俺が前世持ちじゃなかったらぶっちゃけ信じてないんだがな。

「それにしても……なんで病院にいるんだ？」

ふと、疑問に思った事が口からこぼれ落ちる。この部屋が一般的な病院だと言うのは分かる。

だけど一体どこの誰が傷だらけだった俺とドレスアップされた美遊と桜を保護してくれたのだろうか？

見た目からして厄介事の塊みたいな俺たちを助けるメリットなんて無いはずなんだが……。

ちなみにあの似非神父が俺を助けた理由はあいつにメリットがあったからだ。

ならば、俺たちを助けるメリットは何かと考えると答えは簡単だった。

俺たちの魔術的な特性は魔術師ならば喉から手が出る程珍しいも

のだ。

俺は英霊エミヤから受け継いだ起源と魔術属性『剣』、起源と属性『剣』の影響で愚直なまでに『剣』に特化し宝具さえも貯蔵する固有結界、そして半ば近い未来に至ったかもしれない己自身である英霊エミヤに置換されたこの身体。

美遊は神稚児信仰を元にした『聖杯』の力。

桜も限定的ながら聖杯としての能力と魔術属性『虚数』。

これはあの似非神父こと言峰綺礼から聞いたことだ。

仮にそれらが看破されていたら、そしてここが魔術師の息の掛かった施設だった場合、俺が二人を守らねばならない。

「この身体で何処までやれるか分からないけど……いざとなったらやるしかないか……」

そう決意してしばらくの間、警戒をしているところの部屋に向かって複数の足音が近付いてくる。

俺はいつでも投影が出来るように魔術回路を起動して身構える。

「っ!?!」
「初見で即座に反応するか……。余程の修羅場を潜り抜けたようだな」

が、その瞬間近付いて来た気配が消え息なり人影……。ゴスロリのファッションがよく似合う美遊よりも幾ばくか年上に見える少女が病室の窓の前に現れる。

その現象には覚えがあった。

エインズワースの空間を置換魔術する擬似的な転移、クラスカード『魔術師』^{キャスター}を使っていた男が使用した神代^{転移}の神秘^{魔術}その物だ。

どちらをとっても目の前に居る少女は簡単には勝てそうにない存在だった。

それに通路に居る連中が乱入してきたらそれこそツミだ。

カードが手元のない現状、無理を押してでも生身で戦う事はリスクが高過ぎる。

だから、俺は目の前の少女に話し掛ける。此方に害意が有るか無いか見定めるためにも。

「まあ……似たような奴等と敵対してたんでね。

で、あんたは俺達をどうするつもりだ？ 解答によつては容赦はしない」

「まあ待て。そう殺気立つな、少年。私は南宮那月みなみやなつき。この島で英語教師をしながら依頼で警備の仕事を受け持ったりしている。

まずは私たちは君達をどうこうするつもりはないと言うことを先に言っておこう。

対価を払うなら生活も援助も出来る。

私がここに来たのはどうしてお前たちがあの場所に転送されたのかその経緯が知りたい一点だけだ」

俺は切嗣から教わった相手のちよつとした表情の変化、身体の仕草を観察し嘘を付いていないか見分ける技術を用いて南宮那月と言う少女が嘘を付いていないと判断する。

もつとも相手側も意図的にそう言った行動を制御出来るやつらも居るからそう言う手練れには通用しないのだけれどもな。

「そうか……。なら良いんだ……。俺は衛宮士郎。

特殊な魔術師とでも思ってくれればいい。えつと……。どう説明したらいいか解らないけど俺が解る範囲で良いなら話すよ……」

そこから俺は日が暮れそうになる寸前まで俺と二人が置かれていた状況やこの場所に来た経緯、聖杯戦争の事を語った。

推測だが、俺達が異世界からやって来た存在の可能性が高いことも

話しておく。

そして、話していて驚いたのは彼女が既に成人していた事だ。

妹と同じか少し年上かと思っていたと言ったら手に持っていた扇子美遊で殴られた。解せぬ。

「聖杯戦争……にわかには信じれん。」

万能の願望器を起動するため英雄の力を宿し、殺し合う儀式……か……。

極めつけはその聖杯とやらが実行した次元跳躍……。この世界に存在しない魔術理論からなる魔術礼装、物的証拠が揃いすぎている。確かに全てを話すのは不味いな。確実に狙われる」

彼女は腕を組み、額に手を当てる仕草をする。そして、暫くすると自己完結したかの様にウンウンと首を縦に頷いた。その後、急に話を切り替えてくる。

「で？衛宮。お前はこれからどうする？ 現金は勿論の事で、出生証明書もなければ戸籍もない。そんなお前たちがどうやって生きていくんだ？」

「それは……」

思わず彼女の問いかけに答えようとしたが言葉が詰まる。考えても見なかった。

俺が衛宮士郎になった時とは違う。俺はあの世界に元々存在したこの身体に憑依する形で転生した。

だが、今は違うんだ。俺達は元々この世界に存在していなかった。それがそう言う意味かハッキリと理解できた。

「その様子だと……どうやらなにも考えていなかった様だな」

「……」

俺は無言でうなずき肯定する。

呆れ顔で『こいつバカだな』って感じの感情を込めた視線が俺に突き刺さり非常に辛いのだが……。

「……まあ、その部分は何とかしよう。お前は利用価値が高そうだしな」

「……すみません。俺でよければ力になります」

|| || || || || || || ||

夏宮那月女史と契約を交わしたあの日から一ヶ月が過ぎた日、俺は美遊と桜よりも早くに病院を退院することとなった。

どうやら、二人の身体は俺以上に疲労やダメージが貯まっていたらしくしばらくは絶対安静と言う診察が下された。

俺？ 英霊エミヤに置換された身体だが不思議なことに魔術を使っても負荷こそ有れど病状が現状から進行しない。

恐らくだが……この世界が元居た世界と完全に切り離された異世界だからかもしれない。

更にはカードで夢幻召喚インストールが出来ないことから英霊の座からも断絶されている可能性が高いかもしれない。

俺の症状は英霊の座に記録されていた守護者エミヤに置換されていく事によって起こっていた。

だから、置換するべき対象も居ないとすると何も起きないのかもしれないな。

ま、結局は想像の範疇でしかないから正確な事なんてなにも解らないのだ。

よって、無事傷も癒えた今病院に入院する必要が無くなってしまったのでこうして退院することに。

そして、そんな俺を見送りに美遊と桜が車椅子に乗りながらも病院の正面玄関まで付き添って来る……のだが、俺は二人から色々と念を押されていた。

「士郎さん、あんまり無理しないでくださいね……。士郎さんは直ぐに厄介事に首を突っ込みますから……」

「お兄ちゃん、絶対にお見舞いに来てね……。もう、離れ離れなんて嫌だから」

あの聖杯戦争の反動か美遊はブラコンが加速し、桜はやたらと俺が無茶をしないか凄く心配してくるようになった。

しようがないと言えばしようがないが少しやりづらいのもたしかだ。もしかしたら二人の心の傷は思った以上に深いのもかもしれない。

まあ、こればかりは時間が解決してくれることを願うしかない。

「分かってるよ。」

もうあの時みたいな無茶はしないからな。まあ……。あれだ。美遊も桜も早く治して一緒に暮らそう。二人は俺の心配よりも身体を治すことに専念してくれば俺は嬉しいな」

「まったく……。士郎さんにそう言われたら何も言い返せないじゃないですか……」

「うん、分かった……」

二人の頭を撫でながら本心を語る。その後、二人は看護師さんに病室に連れていかれる。

「さてと……。行きますか……」

その後、俺は夏宮女史に手渡された地図を片手に集合場所で夏宮女史の勤務先である彩海学園へ向かう。

本来なら案内してくれるとの事だったが夏休みの補習の準備で忙しいらしく案内は無理だったらしい。

「しかし……この場所が人工的に造られた島だなんてにわかには信じられない……」

俺達が転送されたこの場所は紡神島いとがみじまと言う。自然の島ではなく東京の南方海上330キロメートル付近に浮かぶ人工島ギガフロートだった。

「しかも管理維持に魔術が利用されているとなるといよいよ異世界染みてるよなあ」

更には元の世界では魔術……もとい神秘の技術は秘匿するものであったのに対してこの世界は洋上に浮かぶギガフロートを固定するために科学と併用して魔術をも利用されている。

あと、魔族と呼ばれる人外や魔物と呼ばれている幻想種も普通に存在している。

ぶつちやけた話、元居た世界の平均的な魔術師なら泡を吹いて卒倒していた筈だ。

そして、あまり関係ないのだが……夏宮女史曰くこの世界でも俺の魔術は異端だって言うのだから笑い物ではあるな。

「まあ、この世界で俺が全力で戦う事は余程の事が無い限りは無いんだからうだうだ考えてもしょうがないか……しかし……暑いな、ここは」

東京の南方海上330キロメートルと言う立地は伊達ではなくどちらかと言うと熱帯に近い気候と言うこともあり……紡神島は暑い。そんな中、外を歩いていると気候が狂い季節が反転した世界の出身としてはかなりキツイ。

そして、たまたま見付けたショッピングモールで一旦休憩すること

にした。

「ふう……やっぱり空調って素晴らしいな」

そんな事をぼやきな、ベンチに腰かけ一息つく。病院で貰ったタオルで汗を拭おうとする。

その直後、シヨップینگモール内にけたたましい警報が鳴り響き、それを聞いた客が一目散に逃げ始める。

警報と共に流れるアナウンスの内容から夏宮女史から聞いたこの島の常識の1つを思い出す。

魔族はこの島で生活するためには特別市民登録証が必要で人に害がある規模の魔力を使用すると現状のように待避警報が発令されるらしい。

「……………つ。クソツタレ……………!!」

辺りを見回すと銀の槍を持った少女に魔力の塊で構成された魔獣が突っ込む状況だったのだ。

とつさに身体が動き出し、ごく自然の動作で身体強化を施す。

それと同時に陰陽干将・莫耶の夫婦剣を投影し少女と魔獣の間に滑り込み、魔獣を吹き飛ばす。

「……………え？」

少女が俺を驚きの表情で見ている。

元々オリジナルの干将・莫耶は対怪異専用の宝具で怪異に対して凄まじい性能を誇るの、その投影品レプリカでも成るべくして成った状況だ。

ああ、やっちゃったな。と心のなかでぼやいてしまう。

厄介事に首を突っ込まないと桜と約束していたのにも関わらず、こうして首を突っ込んだ現状に思わず苦笑の笑みを浮かべてしまった

のは悪くない筈だ。

「大丈夫か？」

そして、俺は改めて呆然としている槍を持った少女に声を掛けるのだった。

第3話

私は困惑していた。

ただでさえ、慣れない都会に来て監視対象である第四真祖カレイド・ブラッドとされる少年、暁古城あかつきこじょうを尾行していたのに魔族フリーク（特別市民登録証で確認済み）の男性二人組に絡まれたのです。

「ねえねえ、その彼女。どうしたの？ 逆ナンでも失敗した？」

「退屈してるんなら、俺たちと遊ぼうぜ。俺ら、給料出たばっかで金持ってるからさ」

「あ、いえ……私には用事が有りますので……」

「良いからさ、俺らと色々楽しいことしようぜ」

「それじゃあ、行こうか！」

「っ……?! 止めてください!!」

私の腕を掴み強引に連れていこうとしてくる魔族の男の手を咄嗟に振り払う。

「つてえな……このガキがお高くとまってんじや……ねえ!!」

「っ?! 若雷わかいかづちっ!!」

手を振り払うとその魔族フリークは逆上し、なんとスカートを捲り上げてきました。

私はほぼ条件反射で劍巫の技である《若雷わかいかづち》を放ってしまいます。

「このガキ!!攻魔師かよ!!クソがっ!!」

威力を抑えたとはいえ吹き飛んだ魔族の男は私を攻魔師だと看破し、本性を現しす。

そして、私はその男の正体を見て内心驚いてしまう。

「D種!!」

欧州型吸血鬼^{D種}。最強の魔族と名高い吸血鬼の一種で忘却の戦王^{ロストウォーロード}を真祖とする血族。一般的な吸血鬼のイメージに最も近い者たち。

そして、その吸血鬼には魔族の王と言わしめている切り札がありません。

「灼蹄!!その女をやっちまえ!!」
シヤクテイ

D種の男は絶叫し、左脚からどす黒い炎を吹き出した。その炎はやがて歪な馬のような姿になり現れた。

眷獣。

宿主の寿命を代償に実体化する異界からの召喚獣。

意思を持った魔力の塊にして強大な戦闘力を持つ反面、召喚の代償である命の消耗が激しく常人の寿命では一瞬で尽きてしまう。

その為、不老不死である吸血鬼にしか扱えないとされている。

強大な力を持つ眷獣はそれ単体で人類の有する最新鋭の戦車や戦闘機をも凌駕する。

そして、そんな危険な召喚獣がショッピングモールを駆け回るだけで壊滅的な被害が出るのは火を見るより明らかだ。

「こんな街中で眷獣を使うなんてっ!!」

咄嗟にギターケースから、今回の任務の為に支給された七式突撃降魔機槍^{シユネーヴァルツァー}、雪霞狼^{セツカろう}を取り出し、眷獣を迎撃するために構える。

この雪霞狼は神格振動波駆動術式^{シユネーヴァルツァー}と呼ばれる魔力無効化術式が組み込まれています。簡単に言ってしまうえば魔力を無力化する槍です。

そして眷獣が私に向かって駆け出したその時、誰かが私と眷獣の間に割り込んできました。

何らかの術式で強化しているであろう身体能力と両手に白と黒の中華刀を握り締めたその人は無駄の無い洗練された動きで眷獣を切り伏せる。

「なっ……?! 嘘だろ!! 俺の灼蹄シヤクテイが……」

その光景を見てD種の男は動揺し、私は呆然としてしまいました。目の前の光景がどれだけ現実場馴れしているものなのかを攻魔師として、劍巫として理解出来てしまうからです。

基本的に吸血鬼を平均的な攻魔師一人では対処出来ません。何故なら一般的な攻魔師には眷獣を対処する術が無いからです。

ただし、雪霞狼の様な眷獣を対処出来る術が有れば別ですが……雪霞狼は世界に3本しか無いぐらいに稀少なものです。

だから、目の前の2振りの剣に眷獣が切り伏せられる光景は非常に稀なんです。

そして、目の前にいる人が私達劍巫が出来る規模の神降ろしを遥かに凌駕した規模の神降ろしをしている状態に気が付きます。

何故、一歩間違えれば破綻してしまう状態にしか見えないのに平然として居れるのか理解が追い付きません。

ただ、これだけは理解できました。この人は強い。それも貴族クラスの吸血鬼とも戦えるレベルで。

「大丈夫か？」

その光景を作り出し、張本人は何故か苦笑いを浮かべながら私に声を掛けてくるのでした。

改めて少女を見てみる。そして、この少女に俺の助けは要らなかった事が分かった。

その理由が彼女の持つ銀の槍にある。どうやら魔力その物を無効かする術式が仕込まれているらしく、俺の解析でも先ほどの魔獣程度ならば片手間で倒せる業物だった事が分かった。

「貴方は……一体……？」

そんな事を考えていると呆然とした表情で俺を見ていた彼女が我に返ったのかしつかりと俺を見てそう尋ねてくる。

「ああ………すまない。」

君の持つその槍ならどうとでも成っただろうけど勝手に身体が動いてしまったな。余計なお節介だったかな？」

正体をばらしたら南宮女史に迷惑が掛けるので俺は適当に話題をずらしはぐらかしておく。

それに今さらながら遅い気がするが正体がバレたら間違えなく厄介事に巻き込まれる予感がする。

「あ、いえ。助かりました……でも、なんでこの槍なら大丈夫だと断言出来るのですか？」

「ノーコメントだ。何も自分の情報を好き好んで流す者はそうそう居ないぞ？」

彼女は納得のいかないと言った表情をしているが俺も譲れない物がある。そう簡単に能力の一端とわ言えど話さないさ。

そして、俺はホスト風の二人組を一瞥し彼女に尋ねる。

「さてと……。で？　そこの狼狽えている男はどうすれば良い？　適当に意識を奪って特区警備隊アイランド・ガードに突き出すか？」

「くそっ……。」

「あ、えっと……。」

「ちよつとまった!!」

その時、この暑い時期にパーカーを着込んだ同年代の少年が割り込んでくる。

そして、少年はてきぱきと二人組と此方側に指示を飛ばす。

「おい、おっさん達!!　まだ特区警備隊アイランド・ガードは来てないからさっさと逃げろ!!　これに懲りたらもう中学生をナンパなんて止めろよ!!」

「暁古城?!」

「お、おう……。すまねえなボウズ」

「あ、おい」

「おい、お前らも面倒なことにはなりたくないだろ!!行くぞ!!」

そいつは魔族二人を逃がし、鬼気迫る顔で俺達に着いてくるように促す。

その後、ある程度離れた場所に着き一息ついた時に少女から暁古城と呼ばれた少年が俺たちと向き合う。

その瞬間、なんとも言えない恐怖が俺を襲った。一瞬、ビクリと体が震えるが平静を装い取り付くる。

今の威圧感……。まるで最上級の英霊であったセイバー騎士王や正規の弓兵のクラスカードアーチャー英雄王を夢幻召喚した魔術師ドールズと対峙した時と同等……。いやそれ以上の物を目の前の少年から感じたのだと……？

いや……深く関わらないのが賢明だな。

一端、思考を元に戻すと少女と少年が言い争っている。どうやら少女が少年に割って入った事を咎めているらしい。

「どうして……あの魔族は町中で魔力を使いました。最悪殺されても文句はでないはずです！」

「あのなあ……いくら相手がセクハラしてきても殺そうとするのはどうかと思うぞ……。しかも、お前が先に手を出しただろ？」

「ぐっ……」

「それにお前……隣の人や俺が居なかった時、歯止めが効いたか？」

「……いえ、無理でした」

確かに俺が彼女と二人組に介入しなかったら間違えなく殺していたはずだ。それほどまでに殺気を発していたからな……。

「まあまあ、彼女をそこまで責めるのも良くないぞ？ 結果的に誰も怪我しなかったんだし」

俺は少年、暁古城を宥めるように二人の会話に割って入る。

「俺はあんたにも一言言いたいけどな……」

と、俺にも小言が有るようらしくジト目で見てくるが面倒なのでさっさとこの場を逃げる事にする。どうやらこの二人には浅からぬ何かがあるようなので俺まで巻き込まれたら大変だしな。

「ははは……。それは勘弁して欲しいところだな!!」

瞬時に身体に魔力強化を施し、近くの建物の屋根に飛び乗る。突然

の行動に少女と少年は一瞬呆気に取られているが直ぐに正気に戻ったようだ。

「なっ……」

「じゃあな、俺としてはもう会いたくないかな」

そのまま俺は街を建物の屋根を駆け抜けけると言う冬木でも何回かやったことのある移動方法で移動し、目的地の彩海学園高等部へ向かうのだった。

|| || ||

彩海学園高等部に到着した時には既に待ち合わせの時間から一時間遅れてしまっていた。案の定、夏宮女史はイラついた様子で此方を睨み付けてくる。

「遅い、予定の時間から一時間も遅れるとわな。随分余裕でわないか、衛宮」

「いや……こっちも遅れる正当な理由が有るんですが……」

その言葉に夏宮女史は眉を顰めた。そして、俺の精一杯の抵抗を木っ端微塵に粉碎してくる。

「ほう……ライセンスも持っていないモグリ風情が魔族との戦闘に介入することが正当な理由だとは言うなよ?」

「……すみませんでした」

なにも言えない程の正論と共に防犯カメラに写っていたのである。俺が干将・莫耶を握りしめ魔獣を切り伏せた瞬間の画像が携帯端末に表示されていた。

この瞬間に俺は言い訳が出来るわけがないと悟り、謝罪するしか選

択肢がなかった。

「むっ……、そこまで素直に謝られると調子が狂うな。お前も睨みたいに言い逃れしようと思掻いてくれると面白かったのだがな。まあ、貸し一つだな。後始末はしといてやるから今度私の仕事を手伝え」

と、心底残念そうな表情でぼやく。

「ははは……俺は勝ち目のない戦いは余程の事がないとしない主義なのでね。了解しました、俺に出来ることなら」

仕事を押し付けられてしまったが、こればかりは仕方がない。

何せ俺は、いや俺たちは目の前にいる夏宮女史の後ろ楯が無いと生活さえままならない状況だからな。

「余程のことか……」

と、俺の言葉に何とも言えない表情をする夏宮女史。

彼女の脳裏にはあと一ヶ月は絶対安静を言い渡され入院している桜と美遊を思い浮かべているのだろう。

「まあ、いい。……でお前に小言を言っても意味が無いしな。本題に入ろうとしよう」

そして、俺がこの場に來た本来の目的に話題は移る。

「まずは人工島管理公社に持ち掛けた件だが全てとは言わないが公社側が特区警備隊では対処不可能と判断した際の戦力になること、そしてとある面倒な奴を監視をすることでお前たち3人の住居と身分は保証してくれるそうだ」

そう、俺が今回夏宮女史の元にやってきたのは今後の為にこの島の政府機関と言っても過言ではない人工島管理公社に出した取引の結果を聞いたためだった。

その為にほぼ回復してからは公社に提出するための俺の戦闘データの収集に明け暮れていたのだ。

そして、俺が望んだ結果が得られたわけだが……

「前者は分かる……だけでも後者の監視は何の為に？」

「まあ、待て。資料を読めば解る話だが……監視する対象は暁古城と言う。とある事件で世界最強と言われる吸血鬼《第四真祖》になってしまった私の出来の悪い生徒でな……」

そして、促され夏宮女史から渡された資料に目を通すと先ほど会ったあの人の良さそうな少年の顔写真が添付されていた。

「暁古城自体はそこまで危険な存在じゃないが……持っている力が問題だ。」

それこそ奴が力の制御に失敗すればこの紡神島が沈む可能性があるほどに。だから、奴等公社の連中は万が一に備えて監視役を付けていると言わうわけさ。

それに四六時中監視役をしろとは言われてないから可能な限りつて奴だな」

「成る程……と、すると俺の役目は超遠距離狙撃か白兵戦つて所か……」

「そうなるな。まあ、そんな事は無いと思うがな……。あれは体はバケモノになっても心は人間のままで年相応の子供だからな。手間のかかる年下の後輩が出来たぐらいの心持ちで居ればいい」

「了解しました」

「ああ、そうそう。お前達の住居と戸籍、あとは前払いで報酬が振り込まれている口座の通帳だ」

渡された口座通帳を見てみると何と0が7個もあるとんでもない値段が書かれていた。

「まあ、万が一が有ったら死ぬ確率が高いからな。それぐらいは当たり前だ。ああ、住居だが暁古城の住んでいるマンションで同じ階だそうだ。ちようど部屋が空いたらしくてな。監視と生活を両立するにちようど良いとそこに決まったらしいぞ」

俺の驚き様が面白かったのか夏宮女史は笑いを噛み殺して説明をしてくる。

「はあ……まあ、良しさ。やってみるさ……」

|||||

夏宮女史の元を離れ、今後の家となるマンションに住所を頼りに向かう。

すると、指定された住所に向かうと高級マンションと言っても過言ではないマンションに辿り着く。

まあ、間取りとか階数とか見てたら明らかにいいマンションと言うのは分かってたからそこまでは驚きはしなかった。

「さてと……今日は部屋の様子を見てマン喫かネカフェにでも泊まるとするかな……明日は最低限の家具を調達しないとなあ」

そんな明日の予定を考えながら俺は渡された鍵を片手にマンションへ入るのだった。